

大廻り小廻り山 古代山城 名「菊山城」説の考察

会員 丸谷憲二

1 はじめに

江戸時代の古絵図がある。城内中央に「小廻りノ内」、両端に「築地山小廻り堀筋」と墨書されている。これが初見であろう。古代山城名の推定として「菊山城」説がある。中西厚（当会会員）説である。



大廻り小廻り山の山裾にある瀬戸町菊山(きくやま)に注目された。「菊山は山裾にある地名である。山ではないのに、何故、山がつくのか。」である。

古代山城には、「キ」の字の付く山城が多い。「播磨 城山(きの)・讃岐 城山城(き)跡・備中 鬼ノ城山城(き)・肥前 基肆城(きい)・肥後 鞠智城(きくち)と、「キ」の付く山城が5城ある。「キ」は「城・鬼・基・鞠」と表記されている。

「キ」は何を意味しているのかに2説ある。1説は「キを城とする古代朝鮮語説」である。しかし、古代朝鮮語と称されるのは、10～15世紀に使用されていた中世の高麗語である。

古代朝鮮語の音は不明である。最初に「キ」の付く山城に注目されたのは葛原克人氏(岡山県古代吉備文化財センター)である。「キとは百済の古語で城そのものを指す表音といわれる」としている。

2 肥後 鞠智城(きくち)からの推定

鞠智城は、7世紀後半に大和朝廷が築いた山城である。『続日本紀』に記載されている。663年の「白村江の戦い大敗した大和朝廷が日本



列島への侵攻に」備え、西日本各地に築いた城の一つである。九州を統治していた大宰府やそれを守る大野城・基肆(きい)城に武器・食糧を補給する支援基地とされている。周囲長 3.5 kmは大廻り小廻り山城の周囲長 3.2 kmに近似している。面積 55 ha。八角形建物跡や72棟の建物跡、貯水池跡、土塁跡などが発見されている。

3 『紀氏は周王朝の子孫説』日根輝己説

日根輝己氏(和歌山県地方新聞協会会長)は、「紀氏は何処からやってきたのか」の調査結果として、「紀氏は周王朝の子孫説」を主張している。要点は、「紀氏は中国の古代国家・周(BC1100～BC256)と、周の滅亡後分裂した国の多くを建てた姫氏の血をひく一族だろう。朝鮮南部の伽耶を經由して日本に渡来、九州中央部の佐賀県基山町附近や、熊本の菊池川流域を拠点に根を張り、西日本全域に勢力を広げた。南河内に進出したあと、紀州に居を移した。そして、紀の王国を作った。」である。

「日根輝己氏の主張は、東アジア全体を巻き込んだ人間の大移動を推測した壮大な仮説で、いまだかつて誰も唱えたことがない新説だ。この部分はまだ考古学的な裏付けや文献上での直接的な証拠はないようだが、状況証拠としてはありえぬことではない。」と内倉武久氏(元朝日新聞)は説明している。日根輝己氏は証拠として4説を上げている。

- ① 8世紀の好字令で地名が2字に改められたが、紀氏は頑として変えなかった。「キ」という氏族名に大変なプライドを持っていた。
- ② 『魏志倭人伝』に、「倭人は自ら大夫(たいふ)と名乗っていた。」とある。大夫とは周王朝の官位の一つである。
- ③ 『魏志倭人伝』に、「呉の太伯の子孫と名乗った」とある。
太伯は周の大王の長男であり、呉の王家も姫姓を名乗っていた。
- ④ 紀と姫は字は違うが、音は両方とも「キ」である。

日根輝己氏は「古代の謎に挑戦すると、必ず紀氏と伽耶に突き当たり」と報告している。日根輝己説に追記すれば、③の太伯地名があるのは吉備国のみであり、朝鮮南部の伽耶を経由して吉備国に渡来である。

4 『日本書紀私記零本』「姫氏国名者。倭国之名也」

『日本書紀』は平安時代に、721年～965年の7回の講書が行われた。

『日本書紀私記零本』は、『日本書紀』を講じた博士の私記である。

『日本書紀私記零本』に、「姫氏国名者。倭国之名也」とあり、倭国が姫氏国と呼ばれていたとの記録である。『中国姓氏辞典』に、「姫キ：周朝の宗室が

問。此國稱・姫氏國。若有其說乎。
師說。梁時寶志和尚識云。東海姫氏國。又本朝僧善禱推紀云。東海
姫氏國者。倭國之名也。今案。天照大神者。始祖陰神也。神功皇后者

この姓を用い」とあり、周(BC1046頃 - BC256年)は殷を倒して王朝を開いた。国姓は姫(キ)とある。「キ」とは呉国からの渡来人「姫(キ)」氏のことである。姫(キ)氏は、「紀・木・鬼・基・城等」と表記されている。

4.1 『野馬台詩』「東海姫氏国」

「東海姫氏国」の初見は『野馬台詩』である。著者は5～6世紀の中国梁の武帝時代の僧・宝誌和尚(418～514年)とされる。伝説化された僧である。小峰和明氏(立教大学教授)は「不思議なテキストがある。五言二十四句の短い詩であるが、もともとばらばらに並べかえられ、そのままでは読めないようになっている。しかもその内容は、日本の終末を予言する物で、未来記と呼ばれるテキストの一種であるとされ」と序に書いている。中世では「やまとし」と呼ばれ日本の古称「やまと」の語源に深くかかわるテキストである。

『野馬台詩』に「東海姫氏国」と記述されている。小峰和明氏は「姫氏は『史記』周紀「別姓姫氏」などを見るが、これも日本の女帝のイメージがかぶせられるようになる」と説明している。『野馬台詩』を引用するのは『日本書紀私記零本』である。天照大神や神功皇后が女であることから「姫氏国」の名が出たかとされる。

4.2 吉備真備と「東海姫氏国」

神野志隆光氏(東京大学教授)は、「東海姫氏国考」の冒頭に「東海姫氏国あるいは姫氏国が、この国の呼び名(国号)の一としてあったことは、『日本書紀私記』『日本書紀纂疏』等に見るところである。現在、それについて正面から取り上げられることは無い。取り上げるほどのこともないという扱いである。」と説明している。

室町時代の日本書紀神代卷注釈を代表する二巻をおさめる天理図書館善本叢書『日本書紀纂疏 日本書紀抄』の、一條兼良の『日本

書紀纂疏』に「日本の別号を十三項にわたって取り上げた。その第五である。まず『晋書』に「呉の太伯」の子孫とあるから、宝誌は、周と同じ姫氏だということで「姫氏国」と呼んだものだとしつつ、これを「付会」の言にすぎないと切り捨てている」。比較的近年に包括的に国号を論じた岩橋小弥太『日本の国号』にも「姫氏国」は取り上げられていない。

「野馬台之起」は、遣唐使吉備真備の話として「野馬台詩」伝来の事情を語る。唐において真備に与えられた試練の一つに、宝誌が作った「乱行不同の文」、すなわち「野馬台詩」の解説があった。真備が東の方に向かって仏天の加護を願ったところ、長谷寺観音が蜘蛛となって現じ、その引いた糸にしたがって読むことができたというのである。

5 『姓氏家系大辞典』の「キ」

「紀氏は太古以来の大姓にして」とし、紀キは「木・イ+己・記・城に通じ用ひられ、中世以来、其の韻を添へて紀伊につくる。よりにて、城井・基肆・紀井等にも通ず。」「肥前国に杵肆城(きい)、筑前に記夷城あり、皆古くはキなり。魏志東夷傳に鬼国見ゆ」とある。「播磨備前の紀氏」の説明もされている。

6 まとめ

『晋書』に呉の太伯の子孫とあるから、宝誌は周と同じ姫氏だということで姫氏国と呼んだものだとしつつ、これを付会の言にすぎないと切り捨てている」。ここに、日本の古代史研究の問題点が凝縮されている。結論ありきである。内倉武久氏は「学会の学問以前のきわめて日本的な人間関係ではないでしょうか。・・・違う意見は徹底して無視する。」と纏められている。

大廻り小廻り山の古代山城名説は中西厚氏の菊山城説のみである。菊山城説に注目したい。

7 参考文献

- ① 国史大系第八巻 日本書紀私記』昭和 44 年 吉川弘文館
- ② 『中国姓氏事典』日中民族科学研究所編 昭和 58 年 国書刊行会
- ③ 『謎の巨大氏族 紀氏』内倉武久 1994 三一書房
- ④ 『謎の画像鏡と紀氏』日根輝己 平成 4 年 燃焼社
- ⑤ 『倭国 闇からの光』日根輝己 1990 年 アイペック
- ⑥ 『野馬台詩の謎 歴史叙述としての未来記』小峰和明 2003 年 岩波書店
- ⑦ 『東海姫氏国 考 承平の日本紀講書をめぐって』神野志隆光
『論集神代文学 第二十六冊』万葉七曜会 2004 年 笠間書店
- ⑧ 『日本の古代国家と城』佐藤宗諄 1994 年 新人物往来社
- ⑨ 『東洋文庫 457 続日本紀 1』直木孝次郎他訳注 1986 年 平凡社
- ⑩ 『続日本紀上』全現代語訳 宇治谷孟 1992 年 講談社
- ⑪ 『新訂 続日本紀牽引上 地名部人名部』熊谷幸次郎編 昭和 54 年 文献出版
- ⑫ 『姓氏家系大辞典 第二巻』太田亮 平成 7 年 角川書店
- ⑬ 「古代山城」『吉備考古論考集』葛原克人 2011 年 吉備人出版
- ⑭ 『改修 赤磐郡誌全』岡山県赤磐郡教育会 昭和 55 年 大真屋書店
- ⑮ 天理図書館善本叢書『日本書紀纂疏 日本書紀抄』昭和 52 年 天理大学出版部